

## 第二章 東京の発展と福生

### 第一節 日本と東京の人口

**日本の人口** わが国で政府の手による最初の人口調査がおこなわれたのは、大正九年（一九二〇）の第一回国勢調査で推移がある。

このときの人口は男子二七七六万六四〇四人、女子は二七六一万九六五二人で合計は五五三八万六〇五六人であった。

つづいて第二回は五年後の大正一四年、このときの人口は第一回とくらべ四二〇万人増加している。

以後、第三回は昭和一〇年、第四回は同一五年というように五年ごとにおこなわれている。しかし、第五回は太平洋戦争のために延期され、同二二年におこなわれている。この年の人口は七八一〇万一四七三人であった。この間の二〇年は人口調査によるものであるが七一九九万八一〇四人で、これは一九年の調査にくらべ一五〇万人の減少となっている。これは太平洋戦争による減少とみられる。戦後は海外からの引揚げ、復員による増加で、二五年の国勢調査では八三一九万九六三七人となっており、二〇年以降の五年間で一〇〇〇万人の増加となった。以後増加傾向はつづくが、近年になってそのテンポが緩くなり、平成二年には一億二三六一万一〇〇〇人、そして厚生省の将来推計で

表 VI-1 東京都の人口推移

| 年 次          | 人 口        | 対前年増加数     |
|--------------|------------|------------|
| 明治 9 年(1876) | 873,646    |            |
| 10年(1877)    | 877,027    | 3,381      |
| 17年(1884)    | 1,020,437  | 20,814     |
| 19年(1886)    | 1,455,647  | 221,804    |
| 23年(1890)    | 1,486,671  | -141,880   |
| 26年(1893)    | 1,790,731  | 271,148    |
| 33年(1900)    | 2,014,100  | 72,100     |
| 38年(1905)    | 2,410,500  | 83,100     |
| 44年(1911)    | 2,752,600  | -119,300   |
| 大正 4 年(1915) | 2,857,900  | 26,900     |
| 9 年(1920)    | 3,699,428  | 247,428    |
| 14年(1925)    | 4,485,144  | 299,644    |
| 昭和 5 年(1930) | 5,408,678  | 108,678    |
| 10年(1935)    | 6,369,919  | 193,019    |
| 15年(1940)    | 7,354,971  | 273,371    |
| 19年(1944)    | 7,271,001  | -61,599    |
| 20年(1945)    | 3,488,284  | -3,782,717 |
| 22年(1947)    | 5,000,777  | 817,705    |
| 25年(1950)    | 6,277,500  | 326,725    |
| 30年(1955)    | 8,037,084  | 263,436    |
| 35年(1960)    | 9,683,802  | 334,479    |
| 40年(1965)    | 10,869,244 | 229,883    |
| 45年(1970)    | 11,408,071 | 67,654     |
| 50年(1975)    | 11,673,554 | 18,912     |
| 55年(1980)    | 11,618,281 | -17,130    |
| 60年(1985)    | 11,829,363 | 66,995     |
| 平成 2 年(1990) | 11,855,563 | -22,681    |

なっても止まらない。すなわち、平成三年の東京圏（東京・千葉・神奈川・埼玉の各都県）には、全国の二五・六パーセントの人口が集中し、前記三大都市圏には四八・六パーセントが集中している。日本の政治、経済、文化の中枢機能が集積していることの反映であるだけに、今後もこのような傾向はつづくものと考えられる。

### 東京都の人

東京都統計協会発行の東京都統計年鑑には、明治九年（一八七六）以降の東京都（当時は東京府）の人口推移が載っている。それによると、同九年、東京府域の人口は八七万三六四六人であった。しかし、

このころは、福生をはじめ三多摩の地域は東京府域に含まれておらず、神奈川県に属していた。これらの地域が東京府に移管されたのは、「東京府・神奈川県境域変更法案」が可決された同二六年四月一日法律第一二二号の発令によつ

は紀元二〇一〇年には一億三〇三万七〇〇〇人で、さらに増加傾向が鈍化するとの予測がされている。

人口の増加傾向がこのような状況にある中で、東京をはじめ、大阪・名古屋などの大都市に人口が集中する傾向は近年に

てであった。ところで、現在の区部の人口が一〇〇万人の万台を突破したのが明治一七年、この年一〇二万〇四三七人となった（一二月末現在）。

明治二六年四月、三多摩地域が東京府へ移管されたため、この年の一二月末現在の東京府の人口は二七万人も増加し、一七九万〇七三一人となる。ちなみに移管された当時の三多摩地域の人口は二四万一八三二人と記録されている。そして、これは同九年の人口の約二倍であった。さらに、二〇〇万人を超えたのが同三三年（一九〇〇）、このころは毎年七万人くらいの増加であったが、明治後期には一〇万人、対前年比三・六〇三・七パーセント増というように、東京への人口集中が激しい時代であったといえる。ところが、四四年には一転し、対前年比約一二万人の減少となり、大正六年まで増加傾向の低い時期がつづくのである。

**第一回国勢調査以後の推移** 大正九年、わが国で最初の人口調査が政府の手でおこなわれ、太平洋戦争中は一時中断されたが、以後五年ごとにおこなわれ現在に至っていることはすでに述べた。それによると、東京都の人口が

五〇〇万人の万台にのったのが昭和三年（一九二八）で五一〇万一四〇〇人、戦前の最高は同一七年の七三五万七八〇〇人（どちらも総理府統計局による推計）であった。昭和一八年七月、東京府は東京都となるが、人口は減少に転ずる。さらに、一九年、本土空襲が激化するにつれて、都区内から疎開者が多くなり、二〇年の人口調査では前年比五二・一パーセントも減少、三四八万八二八四人で、なんと三七八万人もが東京都から移動している。

しかし、終戦によってふたたび増加し、二一年、二二年には年間七〇〇八〇万人が疎開先や外地からの引揚げで増えている。このような傾向は二六六ごろまでつづく。そして二八年には、戦前の最高であった昭和一七年の数を超える。以後三〇年代なかばまで、年間三二〇三三万人の増加傾向がつづく。

昭和三十七年、東京都の人口が一〇〇〇万人を突破し、一〇一八万〇二〇三人となる。しかし、このころの毎年の増加傾向はやや鈍<sub>とん</sub>くなり二〇〇二五万人で、年率二パーセント台となってくる。このような人口増の鈍化は四〇年代に入るとさらにはつきりし、年率一パーセントからそれ以下となる。そして、昭和五〇年代前半にはわずかながら減少傾向がみられるようになり、後半には増勢に転じたが、わずか一パーセントの低い数値となっている。以上、東京都の人口推移を概観してきたが、急増から緩い増加へと移り、さらに近年では減少の気配もみられるようになっていくという状況である。

なお、東京都内の人口の動きを概観するならば、都心の区部より周辺の区市部へ、さらに千葉・埼玉・神奈川というような周辺県に人口が移動し、都心部には減少のいちじるしい区部がみられるようになった。東京都の人口分布は、このようなドーナツ化の現象がみられるようになっていく。

## 第二節 福生市の人口変動

**江戸時代から終戦まで** わが国で政府が全国一斉に人口調査を実施したのは、大正九年である。これによって日本の人口が正確につかめるようになった。それ以前の統計数字はあるが、正確さの点では国勢調査のものにはかなわない。しかし、ほかに資料となりうるものがないだけに、正確さに難点はあるものの、参考資料として利用せざるを得ない状況である。

福生市域については、明治三五年（一九〇二）からの数字があるので、次ページに参考資料として掲げておく。

## 第2節 福生市の人口変動

表 VI-2 人口増加状況表

| 年    | 世帯数    | 男      | 女      | 計      | 備 考  |
|------|--------|--------|--------|--------|------|
| 明治35 | 493    | …      | …      | 3,111  |      |
| 40   | 567    | …      | …      | 3,559  |      |
| 大正元  | 612    | …      | …      | 3,763  |      |
| 9    | 833    | 2,325  | 2,706  | 5,031  | 国勢調査 |
| 14   | 978    | 2,804  | 3,103  | 5,907  | 国勢調査 |
| 昭和 5 | 1,024  | 2,969  | 3,036  | 6,005  | 国勢調査 |
| 10   | 1,079  | 3,143  | 3,227  | 6,370  | 国勢調査 |
| 15   | 1,280  | 4,208  | 3,713  | 7,921  | 国勢調査 |
| 19   | 1,911  | 4,808  | 4,767  | 9,575  | 人口調査 |
| 20   | …      | 4,782  | 5,136  | 9,918  | 人口調査 |
| 21   | 2,054  | 5,110  | 5,357  | 10,467 | 〃    |
| 22   | 2,300  | 8,037  | 6,029  | 14,066 |      |
| 23   | 2,730  | 13,849 | 6,496  | 20,345 |      |
| 24   | 2,627  | …      | …      | 20,503 |      |
| 25   | 3,210  | 7,422  | 7,247  | 14,669 | 国勢調査 |
| 30   | 4,174  | 8,932  | 9,241  | 18,173 |      |
| 40   | 8,177  | 14,281 | 14,852 | 29,133 |      |
| 45   | 11,326 | 18,689 | 19,254 | 37,943 |      |
| 50   | 15,034 | 22,589 | 22,829 | 45,418 |      |
| 55   | 16,649 | 24,258 | 24,535 | 48,793 |      |
| 60   | 18,453 | 25,763 | 25,694 | 51,457 |      |
| 64   | 20,748 | 28,165 | 27,727 | 55,892 |      |

ところで、明治以前の人口については、昭和三五年発行の『福生町誌』に次のように書かれている。

寛政十一年（一七九九年、いまから一六一年前）の「多摩郡福生村銘（明）細書上帳」という書きものに、家数二二一軒、人口八三一人、男四三二人、女三九九人となっている。ただし、これは福生町福生分である。福生町熊川分の方はどうであったろうか。天保一四年（一八四三年、いまから一一七年前）の「村方明細帳武州多摩郡熊川村」という書きものに、人数二〇四人、男一〇五人、女九八人、僧一人となっている（但し熊川村の一部）。

今から一五〇年ぐらい前は、当時は人口の変動があまりなかったものと考えられる。福生、熊川あわせてもずいぶんさびしかったろうと想像される。いま（昭和三五年）の福生町全体の人口の約二十分の一、本町七町内の昭和三五年一月一日の人口が一一四〇人であるので、本町七町内の人口の若干少ないだけの人口であったわけである

とあり、現在の福生市域すべてを網羅

している数字ではなく、しかも年代も異なっているので判然としないが、福生村、熊川村を合わせても一五〇〇人以下ではなかったであろうか。

明治時代に入り、二二年脱稿の『福生村・熊川村村誌稿』によると、福生村では人口一五二七人（男七五九人、女七六八人）、戸数二八六戸、熊川村では人口八七九人（男四二六人、女四五三人）、戸数一六三戸であり、総計二四〇六人、戸数四四九戸であった。これを江戸時代の数と比較すると、福生村では約一〇〇年間に人口は二倍になっている。なお、福生村と熊川村の人口比は、明治二〇年ころで二対一で福生村の方が多いのである。このことから推察しても、江戸時代の天保年間（一八三〇～三三）で、現福生地域の人口数一五〇〇人程度が妥当な数ではなからうか。

ところで、明治三五年以降の推移をみよう（表VI―2）。これによると、同三五年三一一人で、二一年以後約一五年間で七〇〇人の増加である。この傾向は大正初年までつづくようである。そして、大正九年の第一回国勢調査では五〇〇〇人の大台を越して、五〇三一人となる。大正四年から九年までの六年間に約一三〇〇人増加している。この数字はそれまでの増加数が自然増加と考えられるくらいの少数であるのに対し、いささか異なっている。これは、おそらく、明治二七年一月に開通した青梅鉄道の福生駅近くに人家が集積しはじめ、都市的様相を呈するようになってきたという地域の変貌が背景にあつての現象と考えられるのである。すなわち、福生駅の開設が誘因となつて、同二七年、内田近之助荒物店が開業（現コンビニエンスストア）、つづいて三五年、笹本金作商店が開店、さらに長沢、加美、永田、中福生などの住民が分家し、駅前に店舗を構え、あるいは近隣他村より進出してくる人が増えた。さらに、四一年（一九〇〇）、青梅鉄道は軽便鉄道から本格的な軌道に改修され、輸送力が増強された。このことは、福生駅を五日市や瑞穂・豊岡方面への物資の集散地として発展させることとなり、加えて明治四二年三月二七日、福生

小学校が加美地区から現在地に移転、福生駅を中心とした一帯が福生村の中核として決定的となった。こうして、当初は長沢地区の一部であった停車場地区が独立する。駅周辺のこのような急激な変貌が、福生の人口増加の背景にあったと考えられるのである。

ところで、前掲の表によると、人口増加の第二の山は昭和一四年から一五年にかけてである。この間になんと一〇〇人も増加している。現在のように大きな企業が存在する時代なら珍しい現象ではないが、昭和一四、五年という福生村はもとより、三多摩一帯はまだ農村地帯の色彩が強い時代である。これは、陸軍航空審査部が建設されたことによる現象である。工事関係者がどっと福生村になだれ込んできたためであった（このときの工事の受注は株式会社浅沼組で、工費は一六五万八〇〇〇円、工期は一四年九月～一六年一月までであった）。こうして飛行場がつくられた福生町（昭和一五年に福生村・熊川村が合併し町制施行）には、軍関係者が急増する。

昭和一五年（一九四〇）の男女の数を比較してみると、男が女より五〇〇人も多く、一八年は一〇〇〇人も多いことでもそのことがわかる。そして、二〇年は九九一八人で、大正九年第一回国勢調査時の約二倍で、この二五年間に五〇〇〇人近くの増加で、明治二〇年と比較すると四倍、さらにさかのぼって江戸時代後期と比較すると、約一〇〇年間で実に七倍になっている。

**終戦後の推移** 表VI—3で太平洋戦争後の人口推移をみてみよう。

この表は、福生市を中心とした周辺市の資料を載せたものであるが、各市の地域性をよく映し出している。すなわち、立川・昭島の両市は昭和一九年にくらべ二〇～二一年は大きく減少している。これは、両市にあった日本軍関係の工場や施設が閉鎖、縮小されたことともなう減少と思われる。

表 VI-3 昭和20年以後の人口推移の周辺市との比較

| 年<br>市名 | 昭和19   | 20     | 21     | 22     | 23     | 25     |
|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 福生市     | 9,575  | 9,918  | 10,467 | 14,066 | 20,345 | 14,669 |
| 立川市     | 60,412 | 43,486 | 49,900 | 58,923 | 62,304 | 63,218 |
| 昭島市     | 21,088 | 18,675 | 23,652 | 33,078 | 39,672 | 31,692 |
| 青梅市     | 40,321 | 53,669 | 50,935 | 51,920 | 52,758 | 53,166 |
| 秋川市     | 10,507 | 14,535 | 13,532 | 13,632 | 13,791 | 13,411 |
| 羽村市     | 6,379  | 8,367  | 8,015  | 8,200  | 8,665  | 8,373  |

(『東京都統計年鑑』による)

第四集の中で青柳福治が次のように書いている。

ところで、飛行場についての変わりようは、今の滑走路は、幅、長さともに昔の倍以上に広がっている。この滑走路工事は、二十一年頃、米軍の工兵大隊が、数百台のダンプ、ブルドーザーを使い、昼夜の別なく多摩川より砂利を運び、たりないぶんは、今の福生市営グラウンド周辺から第三小学校にかけて砂利を採取し、基地へ運びこんだ。この拡張工事は約二か年がかりで、今日のように巨大な飛行場が完成したのである。(『ちいさなかけ橋

一方、青梅・秋川・羽村などの各市は、昭和一九年から二〇年にかけては大幅な増加である。しかも、立川・昭島両市が同二一年以降急激な増加に転じているのに反し、減少している。これは、戦争疎開のために一時的に流入していた人口が、前の住所にもどったことによる減少である。これらの各市に対し、福生市はそのどちらでもなく、二三年まで増加がつづき、とくに、二二、三年のそれはいちじるしい。この理由はなにか。図VI-1の人口構成図を参照されたい。

この図は、昭和二年二月のものであるが、一見してわかるとおり、二〇、二九歳の男子の数がずば抜けて多いのである。普通の人口構成図では男女ほぼ同数というのが標準である。このように働きざかりの男性が急増したのは、横田基地拡張に多くの労働力を必要とし、それら工事関係者が市内に流入してきたことによるのである。

横田基地の拡張工事については、資料など残っていない。しかし、『ふっさっ子』



## 第2節 福生市の人口変動

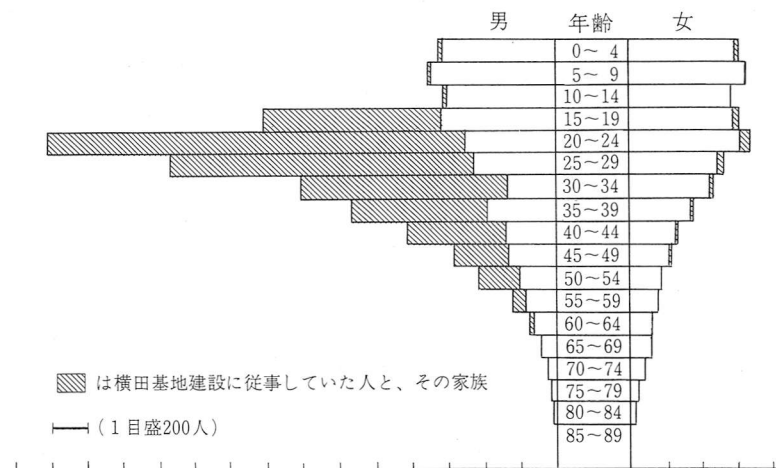


図 VI-1 年齢別人口構成図 (昭和22年2月) (『福生町誌』より)

に徹して」——米軍基地に三十年——)

急増したのはおそらくこのときの工事に従事した日本人の労働者であろう。はたして、拡張工事が終わった昭和二十四年から二五年にかけて、今度は急激な減少となるのである。

**昭和二五年以後** 昭和二五年以後の人口推移をみると、年間一〇〇〇人以下の増加を示す一般傾向の中にあって、四つの

急増期がみられる。すなわち、昭和三七～九年にかけてが第一期で、富士見台に都営住宅が三〇八戸建設され、熊川南地区には東京都住宅供給公社の団地が建設された時期である。つづく第二期は、四二～四年ころの急増期で、四二年に福栄地区に都営住宅が、同年二月には加美平に団地が建設されている。そして、第三期は多摩河原に日本住宅公団の団地八六四戸が建設され、その入居がはじまった昭和四九年から五一年ころにかけてであり、いずれも年間三〇〇〇～四〇〇〇人もの大幅な増加を示している。第四期は昭和六二年から平成元年にかけてであり、民間の高層集合住宅建設にともなうものなどの理由からと考えられる。

つぎに男女の差を見てみよう。

昭和二二～六年の間は男の数が女を上まわり、とくに基地拡張期の二二、三年は大幅であり、二三年にはなんと七〇〇人以上という極端な数となっている。しかし、二七年以降は女がやや多い傾向を持続するが同五九年を境に男が多くなっている。このような人口構成は、平成二年一〇月現在の多摩地区二七市中とくらべて見ても共通した傾向であり、女が男を上まわるのは、武蔵野市・清瀬市の二市があるにすぎない。

なお、昭和二五年の国勢調査で一万四六六九人であった福生市の人口が、二倍になったのは同四〇年であり、この間一五年である。さらに三倍になったのは五〇年でこの間一〇年間と短縮されてきているが、これは前述したように、福生市域に大規模な団地が造成された事情があつてのことであり、市内にそのような開発可能地が乏しい福生市では、今後はこのような短期間の人口急増は考えられないのではないか。将来的には漸増傾向は見込まれるものの、住宅の建て替え、高層化にともなうものと思われるのである。

**新しい町会の誕生と人口** 昭和三五年（一九六〇）は福生町が一五年に町制を施行し満二〇年を迎えた年で、翌三六年に福生都市計画図が作成され、首都圏整備法による開発区域に指定され町づくりは急速に進んでくる。

表VI—4には、この年以後昭和六〇年までの二五年間の町会別人口推移が示されている。この表によると、昭和三五年には南町会からその他（横田）まで二四町会があり、二万〇六七五人の人口であった（以後各年とも一月一日の人口）。ところが、首都圏の人口増加の影響を受けて、武蔵野、鍋ヶ谷戸両町会の一部を区画として、同三七年、富士見台町会が誕生し、二五番目の町会となる。つづいて三八年一〇月、熊川団地が南地区に建設され入居開始、翌三九年四月に熊川住宅自治会ができる。この年の一月には三階建の福生町新庁舎が完成し、名実ともに福生の町づくりが本格化された年でもあった。しかし、これらの投資が過大となったため、負担が大きくなり昭和三九年度一般会計

## 第2節 福生市の人口変動

表 VI-4 町会別人口の推移

| 町会名     | 年 | 昭和<br>35 | 38     | 40     | 42     | 44     | 46     | 48     | 50     | 52     | 54     | 56     | 58     | 60     |
|---------|---|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 南       |   | 417      | 438    | 710    | 507    | 640    | 679    | 754    | 806    | 798    | 823    | 847    | 795    | 776    |
| 内出      |   | 676      | 721    | 799    | 875    | 939    | 1,017  | 1,077  | 1,119  | 1,207  | 1,243  | 1,239  | 1,191  | 1,198  |
| 武蔵野     |   | 1,059    | 1,420  | 1,552  | 1,826  | 2,032  | 2,195  | 2,615  | 2,819  | 3,147  | 3,262  | 3,371  | 1,318  | 1,420  |
| 鍋一      |   | 1,447    | 1,840  | 2,067  | 2,199  | 2,307  | 2,357  | 2,449  | 2,508  | 2,732  | 3,192  | 3,299  | 2,768  | 2,812  |
| 鍋二      |   | 1,415    | 1,473  | 1,535  | 1,712  | 1,842  | 1,907  | 2,172  | 2,222  | 2,418  | 2,502  | 2,553  | 2,570  | 2,708  |
| 熊牛      |   | 1,218    | 1,574  | 1,605  | 1,946  | 2,159  | 2,165  | 2,519  | 2,460  | 2,693  | 2,817  | 2,838  | 2,282  | 2,391  |
| 牛一      |   | 784      | 887    | 937    | 1,024  | 1,112  | 1,045  | 1,096  | 1,102  | 1,169  | 1,252  | 1,260  | 1,284  | 1,327  |
| 牛二      |   | 766      | 902    | 1,028  | 1,194  | 1,353  | 1,418  | 1,629  | 1,757  | 1,818  | 1,945  | 1,924  | 1,948  | 1,992  |
| 原ヶ谷戸    |   | 665      | 977    | 1,156  | 1,343  | 1,476  | 1,512  | 1,907  | 2,191  | 2,289  | 2,490  | 2,541  | 2,610  | 2,845  |
| 志茂      |   | 825      | 876    | 893    | 923    | 988    | 956    | 953    | 978    | 1,226  | 1,349  | 1,408  | 1,335  | 1,487  |
| 志茂二     |   | 1,557    | 1,790  | 1,771  | 1,895  | 2,052  | 1,851  | 1,888  | 1,923  | 1,823  | 1,763  | 1,747  | 1,662  | 1,759  |
| 本町一     |   | 610      | 544    | 513    | 531    | 511    | 480    | 460    | 456    | 410    | 374    | 335    | 320    | 311    |
| 本町二     |   | 681      | 646    | 715    | 607    | 533    | 494    | 470    | 437    | 421    | 407    | 387    | 361    | 402    |
| 本町三     |   | 394      | 415    | 293    | 398    | 381    | 353    | 325    | 301    | 274    | 259    | 239    | 363    | 351    |
| 本中央     |   | 906      | 860    | 873    | 734    | 706    | 660    | 590    | 552    | 516    | 476    | 456    | 463    | 464    |
| 本町六     |   | 719      | 831    | 820    | 826    | 838    | 777    | 786    | 782    | 742    | 748    | 733    | 720    | 723    |
| 本町七     |   | 1,140    | 1,824  | 1,859  | 1,866  | 1,936  | 2,029  | 2,504  | 2,809  | 2,935  | 3,026  | 2,935  | 2,537  | 2,482  |
| 本町八     |   | 1,857    | 2,618  | 2,665  | 3,017  | 3,102  | 3,973  | 4,695  | 5,188  | 5,478  | 5,765  | 6,039  | 2,751  | 2,783  |
| 永田      |   | 754      | 806    | 817    | 819    | 816    | 860    | 843    | 803    | 817    | 837    | 860    | 1,088  | 1,086  |
| 長沢一     |   | 476      | 594    | 562    | 543    | 571    | 577    | 607    | 644    | 663    | 674    | 639    | 751    | 767    |
| 長沢二     |   | 673      | 761    | 790    | 787    | 754    | 766    | 747    | 774    | 776    | 749    | 745    | 701    | 707    |
| 加美一     |   | 527      | 548    | 553    | 548    | 568    | 564    | 574    | 521    | 507    | 509    | 480    | 489    | 568    |
| 加美二     |   | 907      | 1,179  | 1,207  | 1,451  | 1,526  | 1,558  | 1,685  | 1,764  | 1,947  | 2,042  | 2,074  | 2,639  | 2,678  |
| その他(横田) |   | 187      | 86     | 72     | 111    | 112    | 112    | 102    | 102    | 93     | 102    | 99     | 117    | 121    |
| 富士見台    |   |          | 1,118  | 1,824  | 1,627  | 1,489  | 1,209  | 1,191  | 1,154  | 1,094  | 999    | 869    | 799    | 718    |
| 熊川団地    |   |          |        | 1,517  | 2,033  | 2,107  | 2,079  | 2,073  | 1,985  | 1,840  | 1,753  | 1,749  | 1,747  | 1,732  |
| 福栄      |   |          |        |        | 617    | 946    | 1,017  | 1,112  | 1,207  | 1,163  | 1,102  | 1,090  | 1,076  | 1,026  |
| 加美平団地   |   |          |        |        |        | 3,113  | 3,379  | 3,469  | 3,500  | 3,285  | 3,231  | 3,222  | 3,190  | 3,145  |
| 玉川台     |   |          |        |        |        |        | 304    | 318    | 338    | 342    | 345    | 329    | 347    | 374    |
| 福生団地    |   |          |        |        |        |        |        |        |        | 2,463  | 2,588  | 2,549  | 2,509  | 2,531  |
| 武蔵野第二   |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 107    | 185    |
| 福東      |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 2,048  | 2,468  |
| 南田園一    |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 682    | 808    |
| 南田園三    |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 554    | 588    |
| 本町八(第二) |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 2,107  | 2,059  |
| 武蔵野台第一  |   |          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1,334  | 1,665  |
| 計       |   | 20,660   | 25,728 | 29,133 | 31,959 | 36,909 | 3,8293 | 41,610 | 43,202 | 47,086 | 48,624 | 48,856 | 49,563 | 51,457 |

で約九一〇〇万余円の赤字を生じ、四〇年八月には町は財政再建団体に転落する事態に直面する。

昭和四二年(一九六七)二月一八、九日の両日、かねてから建設中の加美平団地への、第一回の入居が開始された。競争率一倍という難関をくぐって六七二世帯が入居、つづいて三月八日から一五日まで第二次募集がおこなわれ、四月に三七〇世帯が入った。この加美平

に町会ができたのは翌四三年四月であつた。一方、第三小学校東南に四二年四月、福栄町会ができてゐる。

さらに、四六年四月、富士見台、福栄町会から玉川台町会が分離し、五一年、多摩河原に福生団地自治会が、同五年、武蔵野町会より武蔵野第二町会および福東町会が生まれ、このほかに多摩河原に南田園一、南田園三、本町に本町八の第二、武蔵野台に武蔵野台一丁目の六町会が生まれ、この二五年間で人口は約二・五倍、町会数は二四町会から三六町会へと五割増である。なお、平成三年一〇月に富士見台、福栄町会にあつた第三都営から第五都営までが高層化され、面目を一新した。これにともない、旧都営住宅は都営熊川アパートと名称を変更し、一号棟から一八号棟は富士見台自治会、一九号棟から二一号棟までは福栄町会と区域が変わり再編成された。

ところで、これら新しく誕生した町会を形成の経過から分類すると、旧来の町会が人口増加のために分離独立した武蔵野第二、福東、本町八（第二）、玉川台のような町会、新設の団地などが出現したために生まれた熊川団地や富士見台、福栄、加美平団地の自治会、および新開地に住宅が建設されて町会が形成された南田園一、南田園三、武蔵野台一丁目の町会というように三つに分けられる。これら町会の人口推移は、前述のように誕生した年代や経緯から多様であるので、すべての町会に一律には比較できない。

そこで、町会域に変化がなく、しかも昭和四〇年代前半にすでに成立していた町会に限定し、人口の推移をみると、もっとも人口増加がいちじるしいのは原ヶ谷戸町会の約四倍がトップであり、加美二の約三倍、内出、鍋一、鍋二、熊牛、本町七などがこれにつづく。

このような動きを農地転用状況（他人譲渡分）からみると、次のとおりである。すなわち、本町八、武蔵野、鍋一、熊牛町会内での農地転用が多いことがわかる。そして、これに自家転用分を加えてみても、この順序に大きな修正は

## 第2節 福生市の人口変動

表 VI-5 農地転用（他人譲渡）の多い町会（単位 a）

| 年<br>町会名 | 昭和<br>34 | 36    | 38*1  | 41*2  | 47    | 50    | 53    | 56    | 59*3  | 計     |
|----------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 武蔵野一     | 183.5    | 51.0  | 41.8  | 30.9  | 95.3  | 27.2  | 66.5  | 8.1   | 2.2   | 506.5 |
| 鍋鍋二      | 62.5     | 50.7  | 19.7  | 24.0  | 155.5 | 52.7  | 31.3  | 19.6  | 9.4   | 425.4 |
| 熊牛一      | 35.3     | 15.4  | 8.3   | 24.8  | 63.9  | 34.8  | 13.9  | 8.3   | 22.6  | 227.4 |
| 熊牛二      | 53.9     | 35.9  | 15.7  | 23.2  | 113.2 | 113.5 | 27.1  | 17.9  | 10.3  | 410.7 |
| 牛二       | 65.4     | 19.3  | 37.0  | 24.7  | 14.2  | 9.8   | 9.9   | 4.5   | —     | 184.8 |
| 原ヶ谷戸     | 114.6    | 9.2   | 26.8  | 13.2  | 57.8  | 16.6  | 8.3   | 4.7   | 17.6  | 268.8 |
| 志茂一      | —        | 13.7  | 7.7   | 12.4  | 77.0  | 85.6  | 29.9  | 22.6  | 11.4  | 260.3 |
| 本町七      | 143.8    | 29.7  | 17.9  | 19.3  | 4.0   | 15.7  | 1.9   | 3.6   | 11.4  | 247.3 |
| 本町八      | 110.6    | 57.3  | 56.7  | 60.4  | 97.7  | 81.4  | 83.0  | 57.9  | 21.8  | 626.8 |
| 加美二      | 19.6     | 47.3  | 10.4  | 24.0  | 67.4  | 12.8  | 83.7  | 8.4   | 0.2   | 273.8 |
| 市全域計     | 881.9    | 424.7 | 334.5 | 304.7 | 882.2 | 533.1 | 394.4 | 182.0 | 151.1 | —     |

\*1は5/22～8/8 \*2は6/13～9/28 \*3は4/1～8/17間の資料が欠失している

必要ない。このような状況から推察して、これらの人口増加の主な要因は町会内にあった農地が宅地化された結果、住宅などが増加したことによるものとみることができるのであり、いわば市街化が進んだことによる人口増加といえるのである。

**人口動態の推移** 最近二〇年間の人口動態をみよう（表VI-6）。  
転出数が不明のため昭和四二年の数値は載せていないが、この年は出生数一五九二人に対し、死亡数一九五人で差引き一三九七人の自然増加である。そして、社会動態のうち転入は五九四二人の多きに達し、内訳は都内から四七一三人、他府県から一二九人となっている。この年は加美平団地が完成し、二月に入居が開始された年である。おそらく、過去、将来を含め、単年度でこれだけの人口が、しかも都内から流入してくるということはまずないであろう。それほどに人口の大移動だったのである。

昭和四三年以後の動きでは、四三～五一年ころの出生数の多さが目につく。これは、三七年から三九年にかけての富士見台の都営住宅や熊川団地への入居者および四二年から四三年にかけての加美平団地や福栄町会の都営住宅への入居者が出産年齢に達したことによ

表 VI-6 最近 20 年間の人口動態

| 区分<br>年 | 自 然 動 態 |     |       | 社 会 動 態 |       |       | 人口増加  |
|---------|---------|-----|-------|---------|-------|-------|-------|
|         | 出生      | 死亡  | 自然増   | 転入      | 転出    | 社会増   |       |
| 昭和43    | 1,646   | 191 | 1,455 | 3,235   | 3,260 | △ 25  | 1,430 |
| 44      | 1,708   | 236 | 1,472 | 3,569   | 4,007 | △438  | 1,034 |
| 45      | 1,232   | 178 | 1,054 | 4,069   | 4,764 | △695  | 359   |
| 46      | 1,058   | 171 | 887   | 4,810   | 4,008 | 802   | 1,689 |
| 47      | 931     | 152 | 779   | 4,585   | 3,745 | 840   | 1,619 |
| 48      | 975     | 159 | 816   | 4,332   | 4,067 | 265   | 1,081 |
| 49      | 1,095   | 167 | 928   | 5,734   | 3,935 | 1,799 | 2,727 |
| 50      | 1,035   | 149 | 886   | 4,097   | 3,990 | 107   | 993   |
| 51      | 984     | 162 | 822   | 4,248   | 4,395 | △147  | 675   |
| 52      | 937     | 193 | 744   | 4,125   | 4,071 | 54    | 798   |
| 53      | 917     | 191 | 726   | 4,197   | 4,183 | 14    | 740   |
| 54      | 849     | 183 | 666   | 3,945   | 4,442 | △497  | 169   |
| 55      | 757     | 192 | 565   | 3,814   | 4,316 | △502  | 63    |
| 56      | 778     | 198 | 580   | 4,074   | 4,424 | △350  | 230   |
| 57      | 787     | 224 | 563   | 3,927   | 4,013 | △ 86  | 477   |
| 58      | 755     | 219 | 536   | 3,962   | 3,890 | 72    | 608   |
| 59      | 814     | 218 | 596   | 4,448   | 3,758 | 690   | 1,286 |
| 60      | 758     | 217 | 541   | 3,635   | 3,616 | 19    | 560   |
| 61      | 806     | 224 | 582   | 3,979   | 3,635 | 344   | 926   |
| 62      | 806     | 246 | 560   | 4,682   | 3,996 | 686   | 1,246 |
| 63      | 799     | 260 | 539   | 5,092   | 3,928 | 1,164 | 1,703 |
| 平成元     | 822     | 275 | 547   | 4,730   | 4,028 | 702   | 1,249 |
| 2       | 794     | 264 | 530   | 4,102   | 3,763 | 339   | 869   |
| 3       | 783     | 272 | 511   | 4,127   | 3,785 | 342   | 853   |

若年夫婦の世代が多かったことを物語っているのである。

ところで、昭和四九年（一九七四）には人口増加の第二の山がみられる。すなわち、このときの転入五七三四人のうち都内からが四三一八人、他府県からが一三〇六人、その他一一〇人であり、転出は都内、その他合計三九三五人で、社会増加一七九九人、それに自然増加の九二八人を合わせ二七二七人である。これを四二、三年ごろの入居者の出生

る自然増加と推察される。四年の社会動態を見るに、転入は三二三五人で、都内からが二二五人、他府県からが一一〇人、転出は都内へ二〇八〇人、他府県へ一一八〇人で差引き二五人の社会減であり、この年の人口増加数一四三〇人はほとんど一六四六人という出生数の結果である。そして、四四、五年もまったく同じ状況によるものであり、前述の団地などへの入居者が

表 VI-7 人口動態の周辺市との比較

| 年<br>市名 | 平成元   |      | 平成2   |      | 平成3   |      |
|---------|-------|------|-------|------|-------|------|
|         | 社会増減  | 自然増減 | 社会増減  | 自然増減 | 社会増減  | 自然増減 |
| 福生市     | 702   | 547  | 339   | 530  | 342   | 511  |
| 立川市     | 264   | 679  | △340  | 852  | 258   | 637  |
| 武蔵野市    | 832   | 536  | △311  | 446  | △55   | 428  |
| 青梅市     | 2,446 | 450  | 2,832 | 488  | 1,595 | 483  |
| 昭島市     | 264   | 609  | 265   | 598  | △10   | 565  |
| 秋川市     | 734   | 234  | 997   | 192  | 846   | 237  |

数とくらべると、五〇年以後の出生数は特別な増加はみられず、ほぼ横這いないし、多少の減少を示している。このような状況から考えると、加美平団地などへの入居者と福生団地へのそれとは年齢構成の面で大きく異なっており、家族構成や家計の面でも異なっているのではないかと想像できる。

**周辺市との比較** 最近三年間の人口動態を福生市の周辺市と比較してみると、福生市の特異性がよくわかる。すなわち、福生市の平成三年一月一日

の人口は五万八九四〇人であり、その自然増減は五一一人の増加である。そして、その内訳は出生七八三人、死亡二七二人である。一方、人口が約二倍の青梅市では、自然増減は四八三人の増であり、内訳は出生一三〇三人、死亡八二〇人、秋川市もほぼ同じような状況を示している。

このように分析してみると、福生市の出生率が異常に高く、死亡率も低い。そこから自然増加数が多いということがわかるのである。平成元年以後の三年間の推移をみても、社会増減および自然増減とも数値は減少してきてはいるものの、やはり周辺市とくらべ、自然増加の多さは突出しているのである。立川市や武蔵野市・昭島市などでは、社会減少をみせる年も出てきている中において、青梅市の社会増加のいちじるしさが目につく。同時に、福生市の出生数の多さと死亡数の少なさからくる自然増加数の大きさもやはり目につく現象であり、今後この

表 VI-8 町会別転出状況 (昭和 58 年度)

| 町会名   | 転出先<br>市 内 | 都区内 | 都 下   | 他 県 | 外 国 | 合 計   |
|-------|------------|-----|-------|-----|-----|-------|
| 熊川団地  | 21         | 7   | 82    | 29  | 1   | 140   |
| 南     | 19         | 5   | 43    | 19  | 0   | 86    |
| 内 出   | 37         | 0   | 64    | 21  | 0   | 122   |
| 武蔵野   | 67         | 11  | 199   | 103 | 3   | 383   |
| 玉川台   | 1          | 0   | 18    | 7   | 3   | 29    |
| 富士見台  | 22         | 2   | 38    | 10  | 1   | 73    |
| 福 栄   | 24         | 4   | 29    | 15  | 0   | 72    |
| 鍋 一   | 75         | 23  | 123   | 67  | 5   | 293   |
| 鍋 二   | 80         | 10  | 86    | 47  | 2   | 225   |
| 熊 牛   | 68         | 11  | 121   | 49  | 0   | 249   |
| 牛 一   | 63         | 7   | 30    | 23  | 0   | 123   |
| 牛 二   | 74         | 11  | 87    | 31  | 1   | 204   |
| 原ヶ谷戸  | 49         | 21  | 84    | 54  | 8   | 216   |
| 志 茂 一 | 65         | 2   | 73    | 18  | 0   | 158   |
| 志 茂 二 | 75         | 7   | 42    | 26  | 1   | 151   |
| 本 町 一 | 10         | 0   | 8     | 4   | 1   | 23    |
| 本 町 二 | 20         | 2   | 9     | 2   | 0   | 33    |
| 本 町 三 | 8          | 1   | 11    | 2   | 2   | 24    |
| 中 央   | 15         | 0   | 9     | 2   | 0   | 26    |
| 本 町 六 | 24         | 5   | 25    | 14  | 7   | 75    |
| 本 町 七 | 122        | 29  | 153   | 82  | 4   | 390   |
| 本 町 八 | 173        | 35  | 344   | 120 | 2   | 674   |
| 加美平団地 | 26         | 8   | 164   | 56  | 2   | 256   |
| 永 田   | 32         | 2   | 18    | 12  | 0   | 64    |
| 長 沢 一 | 16         | 7   | 43    | 11  | 0   | 77    |
| 長 沢 二 | 20         | 1   | 24    | 9   | 0   | 54    |
| 加 美 一 | 6          | 0   | 9     | 2   | 0   | 17    |
| 加 美 二 | 32         | 15  | 82    | 22  | 0   | 151   |
| 福生団地  | 45         | 10  | 114   | 46  | 1   | 216   |
| そ の 他 | 2          | 0   | 7     | 4   | 4   | 17    |
| 計     | 1,291      | 236 | 2,139 | 907 | 48  | 4,621 |



第2節 福生市の人口変動

表 VI-9 町会別転入状況 (昭和 58 年度)

| 町会名   | 転入地 | 都区内 | 都 下   | 他 県   | 外 国 | 合 計   |
|-------|-----|-----|-------|-------|-----|-------|
| 熊川団地  |     | 11  | 50    | 18    | 0   | 79    |
| 南     |     | 17  | 53    | 24    | 0   | 94    |
| 内 出   |     | 5   | 61    | 22    | 0   | 88    |
| 武蔵野   |     | 52  | 223   | 126   | 5   | 406   |
| 玉川台   |     | 1   | 31    | 21    | 0   | 53    |
| 富士見台  |     | 0   | 5     | 4     | 0   | 9     |
| 福栄    |     | 4   | 18    | 7     | 1   | 30    |
| 鍋一    |     | 26  | 159   | 90    | 6   | 281   |
| 鍋二    |     | 6   | 110   | 64    | 2   | 182   |
| 熊牛    |     | 36  | 156   | 57    | 0   | 249   |
| 牛一    |     | 15  | 91    | 27    | 1   | 134   |
| 牛二    |     | 11  | 97    | 35    | 0   | 143   |
| 原ヶ谷戸  |     | 35  | 143   | 56    | 0   | 234   |
| 志茂一   |     | 17  | 58    | 32    | 0   | 107   |
| 志茂二   |     | 11  | 75    | 43    | 0   | 129   |
| 本町一   |     | 0   | 2     | 3     | 0   | 5     |
| 本町二   |     | 0   | 11    | 6     | 0   | 17    |
| 本町三   |     | 2   | 2     | 1     | 0   | 5     |
| 中 央   |     | 1   | 3     | 3     | 0   | 7     |
| 本町六   |     | 4   | 28    | 24    | 0   | 56    |
| 本町七   |     | 26  | 177   | 117   | 7   | 327   |
| 本町八   |     | 41  | 338   | 156   | 5   | 540   |
| 加美平団地 |     | 12  | 67    | 26    | 1   | 106   |
| 永 田   |     | 2   | 21    | 7     | 4   | 34    |
| 長 沢   |     | 4   | 29    | 21    | 1   | 55    |
| 長 沢   |     | 0   | 14    | 10    | 0   | 24    |
| 加 美   |     | 2   | 8     | 6     | 0   | 16    |
| 加 美   |     | 10  | 62    | 41    | 0   | 113   |
| 福生団地  |     | 22  | 118   | 25    | 1   | 166   |
| そ の 他 |     | 4   | 3     | 6     | 2   | 15    |
| 計     |     | 377 | 2,213 | 1,078 | 36  | 3,704 |

ような傾向がつづくのか、興味のもたれるところである。  
**昭和五八年度の人口移動**  
 福生市の人口移動を、市内移動をも含めミクロにつかもうと、昭和五八年度より三年間調べた。それをまとめてみると、五九、六〇年度とも概要では大きな変化はないので、五八年度の状況を以下に記してみる。

表VI—8および表VI—9で転出入の状況をみると、市外への転出数は三三三〇人、転入は三七〇四人で、差引き三七四人の社会増加である。(前述の最近二〇年間の人口動態表中の昭和五八年度転入数三九六二人、転出数三八九〇人とかんがりの違いがあるが、その理由は不明である。ここでは、市役所窓口に保存されている届出票をもとに集計した数である)ほかに市内間の移動が一二九一人あり、両者を合わせると四六二一人で、昭和五八年度全人口の約九パーセントにあたり、市民一人に一人が移動した割合になる。

次に転出を町会別にみると、本町八町会が市内移動をのぞき五〇一人で全転出者の一五パーセントを占めトップである。以下、第二位は武蔵野町会の三一六人、本町七町会の二六八人とつづく。そして、転出先では二一三九人が都下市町村へ移動し、これは全体の約六割にあたる。他府県へは九〇七人、都区内へは二三六人という状況で、都区内へ転出する数が少ないのである。なお、外国へは男子二三人、女子二五人の計四八人が移動しており、基地の顔のぞかせている。月別の転出数を見ると、三月が全体の一七パーセントを占め第一位で、次に一月と五月がつづき、年間に山が三、五月と一二月の二回あることがわかる。

転入では、やはり本町八町会が最高で五四〇人、以下武蔵野町会四〇六人、本町七町会三二七人とつづいている。次に、前住地をみると、都下の各市町村からがトップで全体の六〇パーセントに当たる二二一三人が移動してきている。以下、他府県は二九パーセント、都区内からが一〇パーセントで、外国からというのも一パーセントあり、この点でも転出の場合と大差はない。月別に内訳をみると、三月、四月の二か月に全体の二〇パーセントが転入し、転出の場合より目立っている。このように、福生市の人口移動を詳細に分析してわかることは、どの町会が多いかについて、人口の推移の項で述べたことと同じである。

## 第2節 福生市の人口変動

表 VI-10 年齢別人口の周辺市との比較

(平成4.1.1現在)

| 市 名   | 総 数     | 年 少 人 口<br>(0～14 歳) |      | 生産年齢人口<br>(15～64 歳) |      | 老 年 人 口<br>(65 歳以上) |      |
|-------|---------|---------------------|------|---------------------|------|---------------------|------|
|       |         | 総 数                 | %    | 総 数                 | %    | 総 数                 | %    |
| 福 生 市 | 58,940  | 10,763              | 18.3 | 43,359              | 73.6 | 4,818               | 8.2  |
| 立 川 市 | 154,168 | 24,133              | 15.7 | 114,762             | 74.4 | 15,273              | 9.9  |
| 武蔵野市  | 135,519 | 18,475              | 13.6 | 100,519             | 74.2 | 16,525              | 12.2 |
| 青 梅 市 | 126,261 | 23,024              | 18.2 | 90,174              | 71.4 | 13,063              | 10.4 |
| 昭 島 市 | 105,010 | 18,542              | 17.6 | 76,300              | 72.7 | 10,168              | 9.7  |
| 秋 川 市 | 51,961  | 9,020               | 17.4 | 38,118              | 73.3 | 4,823               | 9.3  |

(「東京としとうけい」平成3年度版)

しかし、どのような動きをしているのかについては、はっきりわかるのである。すなわち、転出、転入ともに福生市以外の都下各市町村からが断然多く、他府県からがこれに次ぎ、都区市内との交流が少ないことが特徴である。このことは、人口動態の項で述べた出生数が多く、死亡数が少ないという人口構成の特徴を思いおこすとき、基地の街としてのイメージがマイナス面に働き、快適な居住地として良い印象を与えていないのではないかと懸念される。その結果が反映されていることによる現象なのかと思われるのである。

**年齢別人口の周辺市との比較** 最後に福生市民の年齢階層の特徴を周辺市と比較してみよう。

平成四年一月一日現在の人口を〇歳から一四歳までの年少人口、一五歳から六四歳までの生産年齢人口、それに六五歳以上の老年人口に分けてくらべてみる(表VI-10)。それによると、福生市は年少人口が一八・三パーセントで、ここに掲げる立川市以下の五市の中ではもっとも割合が多い。このことは、乳幼児から中学生までのいわゆる子どもの数が多いということであり、非常に若々しく、活気のある街であるといえる。

一方、老年人口は市の全人口の八・二パーセントで、六市中最少である。

これは老人の数が少ないということである。これを武蔵野市とくらべてみると、武蔵野市では年少人口は一三・六パーセントで六市の中では最少であり、反対に老年人口は一二・二パーセントで最大となっており、まことに対照的である。このように、福生市は若い人たちが多く活気に満ちた市といえる。しかし反面、高齢者の数が少ないということとは問題でもあり、何がそうさせているのか今後検討すべきであろう。

いずれにしても、すべての年齢階層の人たちが、バランスのとれた割合で共存することが、健全な地域づくりには大切だと考えられるわけで、そのような居住空間づくりに向けて一層の努力が求められる所以である。

昭和二〇年（一九四五）九月五日付「朝日新聞」に次のような記事が載っている。

## 外国人数

立川等へ続々進駐

東京都内への連合軍進駐は三日以来引きつづき行はれてゐるが、その後の進駐状況左の通り

▽三日午後十一時半立川市昭和飛行機工場へ一六〇名同市立川飛行機へ一六〇〇名、同市都立二中へ三〇〇名、

西多摩郡福生飛行場へ一六〇名

▽四日午前二時半北多摩郡調布飛行場へ八〇名、同九時同飛行場へ一〇〇〇名

このように多くのアメリカ人が福生市に入ってきたのは、このときがはじめてであろう。

これ以前に韓国・朝鮮や中国籍の人たちはいたはずであるが、いつごろから、どれくらいの人数が福生に住んでいたのかは、データがなくて詳細は不明である。

昭和四二年、福生市の外国人登録者数は六八五人で、内訳は韓国・朝鮮籍が四八六人でもっとも多く、全体の七〇パーセントを占め、次が米国籍の一四四人であった。これを青梅市の一六七人とくらべてみると、いかに外国人が多

## 第2節 福生市の人口変動

表 VI-11 福生市内の外国人数の推移

(各年1月1日現在)

| 国名      | 年度 | 昭和42 | 45  | 50  | 55  | 60  | 64  | 平成 4  |
|---------|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 総数      |    | 685  | 903 | 784 | 726 | 761 | 821 | 1,206 |
| 韓国・朝鮮   |    | 486  | 522 | 492 | 513 | 465 | 455 | 448   |
| 中国      |    | 38   | 59  | 70  | 60  | 81  | 87  | 133   |
| アメリカ    |    | 144  | 295 | 195 | 136 | 179 | 191 | 170   |
| カナダ     |    | 0    | 0   | 0   | 0   | 2   | 2   | 0     |
| ドイツ     |    | 2    | 1   | 3   | 1   | 1   | 1   | 1     |
| オーストラリア |    | 1    | 1   | 0   | 1   | 1   | 2   | 5     |
| イギリス    |    | 1    | 3   | 5   | 1   | 3   | 4   | 2     |
| フィリピン   |    | 0    | 4   | 2   | 3   | 11  | 44  | 91    |
| その他     |    | 13   | 15  | 17  | 12  | 20  | 36  | 356   |

(「市勢統計」等により作成)

かったかがわかる。

昭和二〇年代の青梅線に乗ってみると、福生駅から乗降客の光景がガラリと変わるのである。当時としては非常に珍しかった白人や黒人が多く乗ってくるのである。もっとも、そのころでも日本人と皮膚の色が同じ外国人もいたことであろうし、中国や韓国・朝鮮籍の人はかなりいたであろうが、それらの人々は一見して外国人とわからなかったり、外国人と考える感覚もなかったのである。当時の青梅線の車両には、たいてい四両連結の車両のうちの二両が半分に仕切られており「進駐軍専用車」という車両があった。そして、体格も栄養状態も良い、軍服に身をかためたアメリカ兵が、ガラ空きの車両に悠然と腰かけている。ときにはパンパンと呼ばれた日本人女性と興じているなどという光景がみられたものである。

ところで、昭和五九年ころまでは、韓国・朝鮮や米国籍の外国人が多い傾向がつづく。わずかな変化といえば、韓国・朝鮮籍の人がやや減少し、中国籍の人が微増というような状況であったのであるが、近年に入り、様子は一変する。日本の経済力が飛躍的に伸びるにつれて、円高が進み、外貨準備高が世界最高となった。このように日本経済が

成長した結果、発展途上国をはじめとして、世界各国から外国人が就労の機会を得ようと、日本の産業技術を習得しようとして、いろいろな目的で入国してくるようになった。国内の人手不足も加わって、平成に入り外国人数は激増した。このような次第で、昭和五八年度の東京都の『統計年鑑』によると、都内在住の登録外国人は一二万八〇四六人で、このうちの一万八九一九人が市部に住んでおり、そのうち福生市は七一六人であったが、まだこのころには福生市に大きな変化がみられなかった。

変化は平成元年になって、流入してくる外国人の国籍の多様化となって現れる。すなわち、今までの韓国・朝鮮、米国籍の人の割合が減り、フィリピンやペルー、ブラジルから東南アジアや南米系の外国人が激増してきたのである。平成元年八二一人であった総数は、同三年には一〇四八人と一〇〇〇人の大台を突破し、四年には一二〇六人となる。そしてその内訳は、韓国・朝鮮籍が依然トップである点は変わらないが、その他が三五六人というその多さである。前年の平成三年には、二二二人であったので、一年間で一三四人も増加している。資料ではこの内訳をつかむことはできないが、日常、市内で散見される外国人の状況から推察し、前述のペルーやブラジル系が多いといえる。さらに、中国籍やフィリピン籍の人も増えており、平成三年にはそれぞれ一〇九人と七二人であったので、かなりの増加といえる。ともあれ終戦後の福生町は、西多摩地域では突出して外国人の多い街であった。多国籍化の傾向は今後ますます進み、人数的にも増加することは確実であろう。そうしてこれからは福生市は国際都市としての一面を持ちつつ発展していくのではなかろうか。